



^ 5  
6512

陽雲精義文庫

陽雲精義文庫

俳諧の古人ありて古風を看破きしを  
 芭蕉公羽の語也されども心むれありしを  
 みるもれありし無きしに指搦ありしを  
 みるもれありし雙雀庵水壺叟先師永葉居士の  
 向上の一路と傳すも相傳の小菴の跣坐  
 して雨露霜雪の修行の身なりし心も  
 元何有の別墅をこゝろ居たりし四方に  
 風交りし言萬語をこゝろ向し粗詞淡  
 薄ありし心法精妙ありし

010/86021628

されたる門下遊子貴賤長短自得の宗師と  
 得仰きされし師恩のよきをいふは  
 遺稿の連句をいふは同盟の佳什  
 と上梓に居士の供養に遠忌の冥福を  
 祭るは嘆きのきこるなり氷壺叟正風の正的  
 を得る麗鄙の獨歩に先師の教導あり也  
 是れは世に偉きものなり

蕙玉



遺稿

松林と中よりせきぬる松ありて  
 ありたりけりけりけりけりけりけり  
 松の葉の緑は雪の白をまじへて  
 松の葉の白は雪の緑をまじへて  
 松の葉の白は雪の緑をまじへて  
 松の葉の白は雪の緑をまじへて  
 松の葉の白は雪の緑をまじへて  
 松の葉の白は雪の緑をまじへて



之如のいもく四神の酒  
 新屋安道一人の信り信り  
 原らのめきはよつ出ま  
 結しるもむきしるも茶  
 湯流くよ娘新ふころ  
 ぢつりき秋の夜を六浦うけ  
 月よ素うつらさぬり者  
 晴網よくをくありおちら  
 去るも過けるりかの物あくる

茶 松 茶 松 茶 松 茶 松 茶

海も雪茶室何くもむきし  
 古く茶くる二の年秋幣  
 大銀扱のてらひも春風よ  
 ありりの如くも秋むきら  
 回もぬ念佛しやるも茶後  
 除夜をくも門の燈明  
 出るも茶くるも小松さ  
 婦しるも白をくも松  
 蝶のきもおれぬもくあり

茶 松 茶 松 茶 松 茶 松 茶

十日代りよ筈の 下 菫

長生をさするすまじりつらよ

昔の秋をさするすまじりつらよ

月回りの戸さすまじりつらよ

夜をさするすまじりつらよ

お六の秋をさするすまじりつらよ

梅よさするすまじりつらよ

つらよの秋をさするすまじりつらよ

まじりの秋をさするすまじりつらよ

松

菫

松

菫

松

菫

松

菫

松

あつらひの秋をさするすまじりつらよ

松葉をさするすまじりつらよ

菫

松

あつらひの秋をさするすまじりつらよ

雨をさするすまじりつらよ

秋をさするすまじりつらよ

小舟の秋をさするすまじりつらよ

梅の秋をさするすまじりつらよ

松

菫

松

菫

松

ありし世もくもくはげしき  
 佛檀を採りて住持の澤土宗  
 錫の法利をささぐる 観 亮  
 大軍も喰ひてぬくもるこまじき  
 ありし世もくもくはげしき 志 馬  
 川城を益人といふのころは  
 ありし世もくもくはげしき 燈 台  
 素の葉の志やつゝ中の月海  
 長くそよそよのわが世のふら 冷

多岐の宿の指をささぐる 菫 帯  
 菫をささぐる世のあはれは  
 新鬼へともつゝと福をささぐる  
 身を採りてささぐる 志 馬  
 草をささぐる首の影をささぐる  
 伊豆の山を採りてささぐる 風 鈴  
 ありし世もくもくはげしき  
 女をささぐる肩目のをささぐる  
 一年よそを採りてささぐる 橋

田舎ありけき木編 雪 出  
 實録のたきぬくちの寝あらし  
 死に吉強よまの 物さ 居る  
 秋の来さぬぬけくる 桔梗とめ  
 うらわく 船小舟 市の 雲  
 葉舟の定然りしよ 是の  
 相のまきさうし 葉へる 玉垣  
 連板の舞ハ常任ぬるなり  
 二より買うし 雪まき 古の  
 宝 葉 宝 葉 宝 葉 宝 葉 宝

風呂ふきの味物抄のけき 葉  
 撰集抄も 寝る 老 人  
 生涯のくら〜 叶華とる 玉垣  
 さうの仕りよ 戸極の物さ  
 名月の茶山あふさ 竹うけき  
 命の吹のせの 寝る 居 葉  
 風呂あふけくも 葉葉を押し  
 宝 葉 宝 葉 宝 葉 宝 葉 宝

少心月多世々法々々世々々々  
 さら凍の凍出と申る朝の降  
 ちんちんあつりとも生る  
 二月とつ底の掛もぬきく債  
 深雪うを掛し日雇の深々  
 およき結句書りふ顔向酒  
 申し極よあつりとも位々附々  
 回々々々々々々々々々々々々々  
 甚きよと張と丸古々々々々

為愛あらんやけり我の候よ成  
 強よ強々々々々々々々々々々々  
 の方の控白くさつりあうら  
 歩あせの欄のうちあむ 月  
 けりけ候末底のあけ一きり  
 其のさきあはつり目くつと居  
 能のさうと結と馬の影あつり  
 屋け者らあを踏ふあ  
 下あくさかあせと踏ふ居

后 葉 跡 后 葉 跡 后 葉 跡 后 葉 跡 后 葉 跡



丁日飛舟のよるうららかなる

鴨

湖のほとりといふところを渡る

鴨

舟のよるうららかなる

鴨

湖のほとりといふところを渡る

鴨

舟のよるうららかなる

鴨

湖のほとりといふところを渡る

鴨

舟のよるうららかなる

鴨

湖のほとりといふところを渡る

鴨

舟のよるうららかなる

鴨

おあらしをうららかに

鴨

舟のよるうららかなる

鴨

湖のほとりといふところを渡る

鴨

舟のよるうららかなる

鴨

湖のほとりといふところを渡る

鴨

舟のよるうららかなる

鴨

湖のほとりといふところを渡る

鴨

玉問の極りのあるまのり日  
何れもあはれもあはれ終のまのり日  
後、成布を押さへて  
ぬむらひの借もたぬ月  
柳の軽さのさる熱汁  
厚のまよくつらまの下角力  
一層のまよくつらまの角力  
後、何れもあはれもあはれ終のまのり日  
昔のまよくつらまの角力

葉 池 葉 池 葉 池 葉 池 葉 池

後、何れもあはれもあはれ終のまのり日  
何れもあはれもあはれ終のまのり日  
後、成布を押さへて  
ぬむらひの借もたぬ月  
柳の軽さのさる熱汁  
厚のまよくつらまの下角力  
一層のまよくつらまの角力  
後、何れもあはれもあはれ終のまのり日  
昔のまよくつらまの角力

葉 池 葉 池 葉 池 葉 池 葉 池



毒の風を吹く——き物まわりの  
 四つうらうらと枯れ成布の音を聴し  
 信宿のふもいしとる善信の屋  
 一——をいへるよ林橋を吹  
 桑畑の終古ま——をいへるよ  
 軒——のつらぬみ言あつた  
 何——人よ入部の善物あつたけ  
 佛問の旅を通き代旅  
 物束のたつしうらある下掃除

具 具 具 具 具 具 具 具

おもくよせぬよ敷をら——  
 懐魚の鼻よ信のうら宿の月  
 村むく伝ふさのやきをむむ  
 いぬのよまの木の葉をたつ  
 杉柵ら——をらるるさ——本  
 あつ——とる所の足踏をのきき  
 宿舎の柱——をらるる  
 菅竹のむよ旅ふ言をむ  
 けのよまの信のぬゆふをむ

具 具 具 具 具 具 具 具

しろくめは身重をむす時  
 取の中を伸ぬ茶の相  
 善信坊の妻は家風は焚火を  
 俗よ居たつらあまう大茶  
 帷子の帯着るを月のお  
 ころく睡むとせむ  
 霞雲に轉んてあまの既除  
 年 年 年 年

木履をまゝに履く其を敷く  
 いろく二度やうの報附の病は茶  
 初年ははるのきい茶のあまを  
 ころくとくお茶うてはあまの茶  
 丸太を海を川上りの茶  
 年の報の付てころくお茶の茶  
 あまをころくの茶は入  
 先礼のころくは茶の古茶具  
 秋口のころくは茶の二文海  
 年 年 年 年 年 年 年

月御り成る廣さるしりー  
 字一此中りもたわきや  
 少用まの紙を敷物に埋せ  
 後心あせし肩の 赤ぬ  
 里のくく阿らまー ぢぢ継娘  
 阿らへもまをー 跡ま汁の突  
 双六のたつて甘く。室の板よ  
 ともうと紙を飛ぶえん。大  
 動化情物に備成のうけり

年 年 年 年 年 年 年 年

鏡を履しり 雲ふ旅さ  
 物さうははぬら 垢を破重附  
 伝へ出さあ。 冬ありの月  
 あまありの隠え豆を志しひ  
 しやうと風の吹あける 春中  
 算ちのくあせの 紙まのこま  
 こあく 帰る 葉あさき 雪  
 早ころら踏おあえん。 水車  
 物さまのーの 又あまをさる

年 年 年 年 年 年 年 年

割合の料 程よむる花の陰 年 菜

上巳の奠斗の袂より出る 年

あふ葉あふく 何れを交より 梅のむ 菜 礼

種井の層うを 固ふ言 芝 菜 礼

引あふよ 三の四の 鴨の尾を 裁く 菜 礼

あふりの人 花をく 高 菜 礼

庭を 裁く 月よ 小棟を けき 合 菜 礼

やうく二葉の 何れの中 及 菜 礼

秋を 裁く 花し 出を 演り 所 菜 礼

くあき 高へ 高く 何れ 菜 礼

以魂 層を 生ぬく 心菜よ 何れ 菜 礼

縋を 裁く 高く 高く 何れ 菜 礼

彩を 裁く 高く 高く 何れ 菜 礼

卵の 裁く 高く 高く 何れ 菜 礼

高を 裁く 高く 高く 何れ 菜 礼

高を 裁く 高く 高く 何れ 菜 礼

初より切るときの比書する。何れも  
 居るものゝまゝなる。論持  
 喰らきよて後ある。月と  
 能くする。言きしもの。田の  
 夕に書む中より旅の字押す  
 是より何れもぬきしもの。能く  
 思ふより。後する。より。年を  
 嵐も。柳よ。あゝ。天  
 州。を。く。は。く。鯨の。を。を。人

茶 礼 茶 礼 茶 礼 茶 礼

國名を。書きし。ち。あ。く。く。う。ま。と  
 返す。あ。く。金目の。石。落の。友は。舞  
 二子。産。戸。を。お。く。つ。せ。く。せ。く  
 糞。舟の。ふ。ち。通。り。ぬ。く。ま。く。く。く  
 切。籠。と。を。を。を。を。様。の。板。を  
 大。江戸の。人。と。ま。く。く。月。の。書  
 百。を。を。を。を。庭。中。へ。ま。く  
 少。く。く。く。く。札。の。く。く。の。物。解。く  
 響。く。く。く。く。く。く。の。物

礼 茶 礼 茶 礼 茶 礼 茶 礼



書

糖とめりて少新若くはる鞠袴

茶

島のさうりやの車負さるめり

乳

牛のほのほしくも色はく

茶

室よりの買者のさくさみ

乳

二十三回忌

脇起之能諧

永葉居士

うれぬれ露うらぬぬ牡丹に  
 うしう秋明くうハ寒き月  
 凍ぬハ人手をうら世活かし  
 家うたううう客の志けし  
 不教をおねハらうおれ軸  
 節句のやうにいそぬ七くら  
 氷壺  
 葱五  
 如白  
 波鷗  
 佳節

菰をう摺活のうらぬニまのうらぬ  
 出代うら君う元彼をうら  
 無あらふうれハのうらうら  
 年意想のうのさう恒るん  
 福有て釣屋ハハ鯉の浮ふ  
 うハは天氣をう良ハハ  
 月行ハ露をううのう久ハハ  
 新綿船力ハううまうま  
 秋風を入るハううハ  
 米鳩  
 裁松  
 文種  
 華兄  
 文里  
 不由  
 山雪  
 不角  
 飲壺

追ぬ島に不きくさくち  
 霞光  
 乞の中明きく暗くさくさ  
 士敬  
 糸掃もさくさくち連てり  
 其泉  
 彼岸うら先くさくさし小  
 多珈女  
 庭まきんくさくさくさ  
 素水  
 麦飯のさくさ味くさくさ  
 閑和  
 燈さきに繪のもさくさくさ  
 柳圃  
 旅かたむけつさくさくさ  
 在爾  
 男はさくさくさくさ  
 風月

信ひそくさくさくさ  
 菜史  
 積うらゆきくさくさ  
 一雨  
 ちとけくさくさを扱くさくさ  
 柳蛙  
 利と幸子に拭く眼のふち  
 雪扉  
 輪の中照のさくさくさ  
 抱中  
 はくさくさくさくさ  
 喜巢  
 水國くさくさくさくさ  
 亀水  
 いく代くさくさくさ  
 義正  
 舟具を吹て善徳の人掛く  
 雨丈

廿七

おのつと雲母のまもる井のま  
竹 右  
扉 葉あつて時めくは花の枝  
薬 雅  
二十一 ころもはも 大 切  
兆 左

先師の門に入て通すはま棒  
しつらふをまの席に臨むに  
あ笑ておのめくまの厭ひまは  
はらもまの廿七の昔まあ

まを思ふまの幻まあ  
はらまのしつらふまの  
ひまのまのしつらふまの  
いまのまのしつらふまの

風の香を薫ゆふ月とありニク  
如 白  
家業の連あはまの  
浩然の氣と累いと先師の教  
訓あはまの今耳の底ま  
いまのまのしつらふまの  
蕙 玉

先師亦葉居士二十之圖忘其法  
延之香華と備へ合堂とて修り  
其の好され一軸あると墨色く  
紙中あきやうあり年一書さの  
とらそんくわし現存のむし  
まうしとらとら

文種

卯のそむぬくそんや ちまのあ  
鳥兎のくつと行ひ水の修り  
流はくもく 先師亦葉居士

とやとあまをあらとらつた  
とあまのあつて古稀を越  
りての御供の修りて修り  
とらとらとらとらの修り  
とらとらとらとらの修り

葉雅

吾前文略

そふれはむく多しとら  
時鳥遠しとら又修り

嘉穀  
我松

そまらちまの 雛花の 折る  
佳節  
さくらや 雲井 ちかちかも 杜宇  
萃兄  
千鳥の おりひし ちかちかも  
五和

相承悟入もあはらうし二十

三年の星霜と雖 罪海に

くつや 靈魂を 繋ぐ 合掌時

いさう詞あり

そまらちまの ちかちかも 茂く形  
氷壺

男ふも 白の 肌ある 夏の 月 山城 公成  
春雨の 降りる 空を 清く 赤甫  
風の 吹くを 根より 糸を 黙池  
菊の 咲く 正月 魚 漁藻  
鶯や 咽と 氣の 息を 路夕  
並姑 田の 通つ 萩 兔尺  
襖の 着る 家よ そい 梅 春海  
白里  
秋風の 吹く ちかちかも 時 芹舎

り逢ふ花を種にまき 堤うねり 橋付 昂左

まある日やあつた 花を種にまきつゝ 煮屋

空降やあつたもあぬ 花を種にまき 武藏 潮水

あつた風多し 是元や 花を種にまき 為山

町並の海もあつた 花を種にまき 尋香

花を種にまき 是元や 花を種にまき 普陽

花を種にまき 是元や 花を種にまき 甘茶

花を種にまき 是元や 花を種にまき 不係

花を種にまき 是元や 花を種にまき 三々雄

花を種にまき 是元や 花を種にまき 波鳴

人の親れあつた 花を種にまき 思樂

呼入るる 花を種にまき 小雲

遠山花白くも 花を種にまき 鳳雛

花を種にまき 是元や 花を種にまき 永年

花を種にまき 是元や 花を種にまき 完鷗

花を種にまき 是元や 花を種にまき 五休

水光接天 武藏

江のしほ 花を種にまき 天の川 等哉

火を焚くあまの子のなれきりし  
 湯豆麩の程味おろえは時多し  
 四阿如くくやまの冬月  
 去年の雪のしほ月や花の春  
 来り人の馳走のまじりたまふ  
 お菊の輝きをたぐり冬籠  
 や焼くうさや遊のまじりしけし  
 雪の梅腰うりおろえきりきり  
 起りたるらねはさやまの鴉

卓郎  
 番城  
 太年  
 永暁  
 花外  
 甘志  
 露屋  
 とき雄  
 奇泉

佳りたる草分たう免の節  
 咲きぬるうさやハなほ  
 身もく久輝ききりりつ出  
 心もくく祝もむまはえ才加  
 蓮華の先あけなれくまひん  
 明星もくくくくく知は方  
 手もくく人まの意はるまふ  
 晒すおあまのくくく月  
 何とぬえ意のまじり月

見介  
 弘湖  
 細雄  
 宇山  
 幽止  
 永揆  
 荷才  
 文昇  
 東枝



折たまの先よし唐もくもり  
 正价  
 近よれとえとえのきもや松飾  
 さら女  
 梅もふたに裾川をらや啼子も  
 黙平  
 柳うらやう吹初る追風も  
 案曉  
 つらふし一編もや牡丹は  
 對鳴  
 取まけそこもら歌しぬ玉露  
 菅磨

西先み

いそよとえとえ少し浦の月  
 春湖  
 言ふ吹浪のと形やちとま  
 伊豆士敬

十月やうまにねはる富士のき  
 推吟  
 今指と田うらんとてむ  
 乙朗  
 川あふ香もまきも  
 吳笠

堂嶋み

谷屋へ嶺もくや  
 翠山  
 られまきと見と向れあり  
 喜雀  
 うまにそらやまふも浮て居  
 夫雄  
 名月や藝も福乃花らり  
 連水  
 米久

枝縄も付て山田水もさうん 其敬  
 ろくい松もいも冥加やあやう苗 壺雪  
 ろく鶏やまもいも帯はメらら 梅處  
 つましくもえ送る厚のふらり 其碩  
 まの秋鳥起もいも家もさか 一葉  
 て〜〜いん〜〜暑もあやうん 一誓  
 名作やまの根もさうんあやうん 如騰  
 おろろ松やあやうん舟の投釣瓶 蘭風  
 家口は付〜〜と〜〜や 回水 駿河 連山

雨の根ハきれ〜水ほや花らり 九成  
 若くもて子流吹ら守紅葉 青溪  
 家ららるるけの長者よ 之の朝 安房 香雪

朝雉子やあやうん 壺横もあやうん 加賀 柳壺  
 夕風もあやうん 吟〜〜天水川 悠平  
 厚もあやうん けの教や田も眠る 越前 布路

鏡豆の多厚に出るを名に秋越後 契史

金花山ふり

高山や月のおうり	波の花	其東
刈草やまらし	巖の音	市猿
赤木は磯をうらむ	五日月	清水
雪の足と知るう	やあやう	海返る
積雪の中流のあそび	信濃川	梅岡
眠るる見ると	あふと	竹文
あふと	松より	あふと
	あふと	古棠

冬より中鮭運之を名にふり  
 けらうと清流をうれ柳 琴丸 里三

あふとやゆらうと日水あふと  
 うらむと水あふと一谷あふと  
 あふとやあふとあふとや花の音  
 ゆらあふと水の中あふとあふと  
 あふとあふとあふとあふとあふと  
 岡西の針のうらふとあふと

武藏	詩道	六采	如錦	櫻得	笠礎	頤神
----	----	----	----	----	----	----

障子もくき水静かきあり物

尾張

我竟

月流や空のふらふらおもしろ

欣尚

竹松やふはりふはりもまじり

静處

漏汐の道とくくれとくく風

蘆錐

先へ来てをきくか歌や花の友

士前

御芽生れ庵のりや也月と梅

常陸

可昇

風騒り来りや秋多し海多し

一笑

眼もくくおのふらふら月を

陸奥

菜史

来は人のある座をなや松乃内

竹塙

見おろすやまむ田の人畑の人

龜政

きし汐の舟はかきしおろる月

桃僊

ふらふらに月のあそびあそびの

霞臺

今きしと柳の舟はくくくを架

湖秋

正月や子の戸をきく客はあそ

露守

とくくやまのふらふらおもしろ

曉華

拍子木のまをきくはあそび

良水

さあそ眼の二重はまをきく

樹岡

藪陰におくれと名をい 桂さく 十 綱  
 雞の音にくつさきと名をい 踏くれ 草牛  
 岸や多きと名をい 花はさき 三千世  
 猿氣はと名をい ぬきや 時音 惠雨女  
 杉葉と名をい ぬき 細の隅 下總 壽山  
 足はくさきと名をい ぬき 稲雨  
 昇はくさきと名をい ぬき 福壽亭 一亭  
 おきさきと名をい ぬき 中つき 松壺

鳥むらや何と名をい ぬき 此 奥 一  
 雲ゆく風はくさきと名をい ぬき 耕 後久九更 々  
 葉はくさきと名をい ぬき 椿 采  
 帽はくさきと名をい ぬき 馬 城  
 うらやと名をい ぬき 龍 山  
 山はくさきと名をい ぬき 旭 洋  
 晴ふくやと名をい ぬき 雨の音 一 誠  
 雲押はくさきと名をい ぬき 波の音 砧 齋  
 うは浪と名をい ぬき 高砂子 知 山

けし午時正とておのふあふの  
 子よははまのきまわさるの雨  
 福んららむさむ火のさうと菊の  
 明らるる未さるるえんて葉の海  
 末るきむきまふし一見は  
 山里はさくらさくらとくさくさ  
 ありよあつとつとつとつとつと  
 月もやとととととととととと  
 出ぬあつとつとつとつとつと

啓陸  
 董雨  
 梅丸  
 季樂  
 蓼洲  
 都年  
 玉里  
 喜水  
 一僊

梵論も筆脱て吹たつとつとつと  
 新なる川を流す一 蝶山  
 新なるや初冬もつとつとつと  
 去るよすは新なるとつとつとつと  
 秋と名をつとつとつとつとつと  
 山と名をつとつとつとつとつと  
 家と名をつとつとつとつとつと  
 多るよすは新なるとつとつとつと  
 多るよすは新なるとつとつとつと

錦文  
 風吟  
 逆志  
 御雲  
 東才  
 馨齋  
 春翠  
 洋と  
 峰秀

江ノ新をくつしきき新橋川 落谷  
 口の親子ちりく岸水か鮎水 覽古  
 日まの日の流す里しや九月尽 知則  
 谷あり洗ふ夏書水硯の形 北泉  
 是のちや日あしく水新くも 野棠  
 咲くも人まら花のやうきん 盛虹  
 おのゝあゝ虫の静やまの言 草山  
 夕まらあゝ静まらうつ言 王民  
 坂ありてこれハ家陰や柳の気 麟趾

あうしや月あうしや山うし 喜重  
 夕雲を穿りしとあふ木村 含香  
 波多き流しつ日の子苗川十四重 繁丸  
 裾掃田子あくらたや夢まら 圃柳  
 日のまらや雨子柳水あまら 文雅  
 さうしとあまら言あし風うし 玄山  
 名月あまらうしとあまら 祖山  
 降をれて月えらまら泊りか 北斗  
 あまら毎にあまらあまら 東谷

七

つよきや小舟のなみち	今をわたりゆくまは	多歳や本賃泊り	春風もまぎる	花のまは	つよき	隈にも
梅一	如柳	序来	雨晴	奇燕	鳥山	文来

をり夢をん	海苔紫の	雪よえる	恒越	うけ	下	よ	湖の
香芸	聊娛	菱波	草芸	九他	不爭	可轉	蓬宇

三



尾張

梅裡

さしてり傘を入れぬれと鳥 士芳

松とさやちえのそめらら 華岳

足もれ恒根よ近し 夕子 三楓

このまゝとあふいし 堀のむ 羽洲

知己よまじくうらわこつ 花 上野 琴堂

来る筈の掛念もあつてもう 雞雄

為くといのちる 雨よ晴を在 抱壺

黄くもれあふ 龍あつてもうのむ 竹磨

玉まはむくふくやうきと白 水明

いとあつた敷のこまあり 鳴子 一亀

常磐木下こまあり 和子 奥岳

強よれを梅く咲ふりおら 物 貫乎

あやちや樹はえ古く 花のち 上総 柏翠

秋のちや年のちとあつた ありひらり 春松

あふらるる 雨の 鳴子 神を月 畝月

あふらるる 雨の 鳴子 神を月 藍山

あふらるる 雨の 鳴子 神を月 素寅

汝の子よもも... 文山  
おのろきに... 寄一  
梅おこち... 東鳴

管根

黄もも谷... 美作 青柯  
粥杖... 遠は 嵐牛  
... 杜水  
... 蒼山

... 武藏 五渡  
... 克明  
不... 齋嶺  
... 寶船  
... 喜山  
... 一方  
... 程山  
... 東子  
... 泰眠

富士筑波のきけきもくわのま 關和  
 江を圍ふ丘やまきぬいつれに 不由  
 住む山のあまのきけきやまきぬ 文里  
 炭くぬきぬれに接し人の孫 松嵐  
 客殿まつ合のまき色きぬ 波洞  
 流るる先へおぬきぬきぬきぬ 保内  
 ぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬ 其聲  
 眼のまきぬ根のまきぬきぬきぬ 桐左  
 うきぬきぬきぬきぬきぬきぬ 吾柳

りまきぬきぬきぬきぬきぬきぬ 歩月  
 きぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬ 智秋  
 きぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬ 吟囊  
 きぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬ 有森  
 きぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬ 蟻足  
 きぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬ 波玉  
 風流の骨ハかきぬきぬきぬ 柳 常陸 和堂  
 唯向し山の根陰に遠きぬきぬ 雙岳

穴ありて茶のありとも。おろし 陸奥 徐逢

あつし久訪あし人や冬牡丹 鷗居

うれ物をいしき見き。尾花は 和好

待ちら世をさむる初時雨 風逸

つをけら雲のゆるぎ陰ねの轉 奇兆

見くくく紅葉とまうしお山小 弁半

初雪はくさくさ波あり雲の脚 由几

筑波寺

片峰を眺めて雲井より 下總 至清

陽さうや庭木のさき一ふくを 秋元

見もたかたの秋葉 恒まり 氣叶

名月や神の燈とまふ森の裏 之試

椋取を子供よきたてし うね 螢雪

秋子お花と見そつむしつ家 雪花

森ちし守風あうり なつ 野の海 可 候

うけらよの物うを せき せき 旭齋 旭齋

人去ておま あし 陸奥 市碩

市神 あし 旭 旭

鳴きくもくもくは鶉の如  
北岨

皆共成佛道

風の如くありにやぬり  
羽雪

ちほ様法を短うおひく  
椿菜

降るとんね風も憂うん  
竹友

くふ耳よ秋ハ来まきり  
柳古

年よる故の春鳴し  
竹茂

鏡のまは湖ををさる時  
素一

月よるん明のまはさる  
松壽

炭の如く掃除も出まて  
杉久

一本ハ矢の仕立  
千集

北國遠望

をこ越し見たり  
一止

あつはりの定りて  
松陽

ふりえの峰を根や  
古槐

稲穂く子外松よ  
壯山

をこつてまは  
其堂

夕暮るまきり  
清民

逐々も逐々も役あり稲菴 某史

うらふすやるまゝのあつたの艶 一鼎

けのくくけのたてたて天鼓の 淇山

瑞飾に整へぬくや家の風 梅曉

や明うまをまて瑞居やあく蛙山城 有節

字本より移りし名をれ紅葉鮒 淡節

を移してふと西子くつたの意 祭魚

新うつた江戸と河を梅の意 自長

眠りてもくまもあつたの山 鳥岳

う焼や鬼をうらふく先 九起

数あつた蒼明し福寿出羽 素山

まのあめをうらふし佛の意 有常

まのまやあめをうらふ意 含香

まのまをうらふ意を梅の意 蟻道

小机へうらふ眠りし意の意 定机

海石のうらふまをうらふ意の意 有雪

ふふのうらふまをうらふ意の中 誠中

今頃... 福多草 護一  
 見了後の... 春生  
 住保... 如水  
 論... 竹亭  
 鷗の... 碧水  
 ま... 江春  
 恒... 静淵  
 知... 唵風  
 う... 風柯

朝夕の... 昂直

松... 陸奥 風志  
 う... 竹泉  
 香... 桃壺  
 松... 安  
 松... 文思  
 藪... 景河  
 鶯... 柏齋

生雲けりくまの嶺さうしーくみか  
 新をすく梅さうのあさ山は月  
 咲りあうそりも踊る冬月梅うぬ  
 くらそりのふきさうのふきさうのふ  
 き昇る日けゆるやうを雉のふ  
 子うくよま植さうのねさうのね  
 名ちくしーりはしぬ味よりまの雨  
 伊勢  
 伊藤入もくや学しふ休のふ  
 果 蕉  
 雨ふらうはあやからる月を春  
 美濃  
 山 士

多うはくえきさう 戦さう 遠 柳 武藏  
 芳 草  
 あさや丘やうのう風うある 雨 橋  
 山里を海さうふらう花の春 由 地  
 あさや丘やうのう風うある 精 義  
 あさや丘やうのう風うある 石 叟  
 昭のゆはくさうあさや丘の月を春 芳 泉  
 兄さうのふきさうのふきさうのふ 木 和  
 くらそりのふきさうのふきさうのふ 冬 年  
 子の戸や極ふらうのふきさうのふ 鳳 洲



あつしとていふことありては甲 大甲  
 権をたしとていふことありては 長江  
 新とていふことありては 下野 其翼  
 ちやとていふことありては 巢竹  
 吹風とていふことありては 山古  
 葉とていふことありては 茂清  
 梅とていふことありては 友松  
 ちとていふことありては 佳山  
 根 嵐や舟とていふことありては 鴨 雪山

あつしとていふことありては 申侯  
 濃く更とていふことありては 朱貫  
 ちとていふことありては 成章  
 ちとていふことありては 音辞  
 ちとていふことありては 小女  
 ちとていふことありては 季宗  
 ちとていふことありては 長雄  
 ちとていふことありては 未足

稀々訪ふ行者ありて梅の香虫 舞史

おの遠き道よりあり久奔らん 柳園

雉もくや杉や嵐の如くまはる 魯雪

雪の中をさの下より流るるは 野道

夜は静しとてささるるは 一聲

春もえりささるるは遠花火 野井

庭に海引く蜩もささるるは 木雞

えりやささるるは人出入出羽 雪山

蝉もくや表口くく杉材 金英

ささるるは梅もえりささるるは 北山

あけの川の川筋下は新舟も 竹園

あけの川の川の梅もくくは 梅軒

最上庄内船中

月と水と静しとてささるるは 由青

ささるる人もささるるは 下總 喜年

云々月の影もささるるは 月杵

吹きんて木の葉もささるるは 雲水 松朗

杉林の通りけりささるるは 桐林

ちとしはくくつりまきり里の雪  
 手枕を志りく遠く暁のまき  
 乾鮭のこぼしの鹽こくり糸  
 牛のあと踏り碓の志く杉  
 兄古きぬ衣のぬきや天の河  
 暮る山えまよふらやとくじ  
 志ありあるふかやまのさぬ内  
 藤の空や夕暮秋のふかきまゆし  
 無外 弘美 子紹 謝兼 花國 梅因 良可 曲川

ちとさるとと見まきり雪ちか  
 かくまに枯ても伏ぬ尾花は  
 乾き枯もぬきぬきしぬ雨ぬ  
 葉はりし見る初雪のまきり  
 ちとくち風ま香のありまきり  
 持とは舟のまきりや暁のまき  
 まきりまきりまきりまきり  
 ちとくちまきりまきりまきり  
 枯枝も葉もまきりまきり  
 米鳩 一 珠 米 箕 風 月 如 拙 徳 子 子 琴 松 子 道 也 枝 川

元日やみ新のよもは夕あらし  
 雪扉  
 多う女  
 素水  
 伏菟もらつとて  
 喜巢  
 柳蛙  
 一雨  
 夏のも砂もわつた  
 龜得  
 龜悦  
 仙月

ねとまふあつたつて  
 歡壺  
 霞光  
 不角  
 夢中  
 秋耳  
 一阿  
 新植せうけの中  
 龜水  
 湯はくそ遊ひあつた  
 蘆鶴  
 ねの道あつた  
 碩水

武藏

名元とておの陽をまゝ 柳ル 不二丸  
 其むくすてんあまさ丸くうん 櫻伍  
 啼やせはるる柳ル 民好  
 呼うす客ハおまてうすくうり 船弓  
 提り梅やとくさとつる緒 喜悦  
 町をたを四子口の遊ル 波翠

程をく一ちくつやちる梅 氷壺  
 の中る小鮎は瀬せうる川 如白  
 春の日はまふ外の如くありて 藻雅  
 春の清みらるるあまのふ 華兄  
 うはまに名のなるとく川柳 波鷗  
 紙衣の手きる葉の流るる 裁松  
 恒み徳ありて世ののちりし 歡壺  
 可られしに志まふ師のあこ 佳節  
 春こと佐後の名山 白

干 舞 玉 々 々 々 々 々 々 照  
 魚 子 廁 々 々 々 女 っ ぎ  
 浪 心 と っ っ っ 急 々 々 々 々  
 明 々 々 丸 々 々 々 々 々 々 月  
 孫 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々  
 海 走 々 々 例 の 流 々 々 々 々  
 ぬ 々 々 々 桐 油 の 子 に っ っ っ 々  
 祢 々 々 の 帯 と 白 々 々 々 々 々 花  
 可 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々

氷 鷗 白 々 節 松 節 兄 氷

高 々 々 牛 々 々 々 々 々 々 々  
 六 位 七 位 の 下 々 々 々 々 々 々  
 背 々 々 被 々 眉 々 々 々 々 々 々  
 っ 々 々 是 代 々 々 々 々 々 々 々  
 細 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々  
 お っ っ 々 々 々 弱 々 々 々 々 々 々  
 痛 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々  
 叱 々 々 々 々 々 笑 々 々 々 々 々 々  
 中 宿 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々

歡 白 節 松 節 鷗 兄 松 々

先くれ猫と鼠あねと  
 月とむくしうら風のあはれ  
 松を萩御の代りなほは  
 新葉の子あはきに干あう  
 うきうきとては土橋仮橋  
 呪とけふをうも能てあし  
 うらうらつらな年もあはれ  
 山をえなれ種まきと花咲  
 長年よかむはららけ

松 氷 雅 節 松 白 兄



